

令和3年度パネル展(会期：令和3年10月26日(火)～令和4年3月27日(日))



邪馬台国への道 (後編)

Kyushu Historical Museum Exhibition guide

1 邪馬台国への道

邪馬台国は弥生時代、倭国と呼ばれた日本列島に存在した国の一つです。古代中国の史書である『魏志』倭人伝に記録され、女王卑弥呼が統治したことで広く知られています。この『魏志』倭人伝が書かれた中国大陸から邪馬台国へ至る道に面した国々の中には、所在が九州に比定されているものもあります。これらの国々については発掘調査が進められ、多くの調査成果が挙げられてきました。

本展では、この邪馬台国へ向かう道に沿って残された遺跡を、2回シリーズで紹介します。後編では、邪馬台国への道が大陸から朝鮮半島などを経て、福岡県に至った後に辿る国々の遺跡について見ていきます。



伊都国王墓—三雲南小路遺跡の調査風景



奴国王墓の上石

2 伊都国・奴国の遺跡

玄界灘を経て九州本土に上陸した邪馬台国への道は、やがて佐賀県から福岡県に入ります。佐賀県と接する糸島市では、『魏志』倭人伝に記載された伊都国のものと考えられる複数の遺跡が発掘されました。

まず、三雲・井原遺跡はおよそ60ヘクタールにも及ぶ規模を有する遺跡です。『魏志』倭人伝では、国々の首都あるいは王都を「国邑」と記載していますが、三雲・井原遺跡は伊都国の国邑に当たります。

この遺跡の西南には、王墓と推定される三雲南小路遺跡もあります。江戸時代の文政5年(1822)、採土中に合口甕棺(1号棺)が発見され、棺内からは前漢鏡・銅矛・ガラス璧・勾玉・管玉などが出土しました。昭和49年(1974)の調査では2号棺も見つかり、豊富な副葬品が発掘されています。1号棺と2号棺は、それぞれ王・王妃墓と推定されています。この他、王族の墓域と考えられる井原ヤリミゾ遺跡や、弥生時代終末期の王墓と考えられる平原遺跡墳丘墓も発掘されました。

糸島市から東に進み、現在の春日市付近で発掘されたのが、奴国に関する遺跡です。須玖岡本遺跡は、伊都国の三雲南小路遺跡と並ぶ、奴国の王墓と考えられる遺跡です。明治32年(1899)、大石の下に埋められていた大形甕棺から、前漢鏡・銅剣・銅矛・銅戈・ガラス勾玉など、豪華な副葬品や装身具が出土しました。

岡本町4丁目遺跡は、昭和52年(1977)に発見された遺跡です。調査の結果、弥生時代中期後半～後期初頭の甕棺200基以上と、甕棺墓以前の木棺墓、祭祀遺構、そして青銅器工房跡などから成る複合遺跡であることが分かりました。とくに、小銅鐸の鋳型は、銅鐸の祖形になる可能性があり、注目されます。

春日丘陵北方の須玖岡本坂本地区遺跡は、平成2年(1990)以降の発掘調査で、弥生時代後期の青銅器製作工房跡が発見されました。工房と考えられる遺構のほかに、鋳型・坩堝・取瓶・鞆羽口など鋳造関連遺物がセットで見つかり、とくに鋳型は鏡・戈・矛・劍・鐸など25以上に及んでいます。

3 不弥国から投馬国へ

春日市の東側に広がる糟屋郡域は、『魏志』倭人伝に記載されている奴国との位置関係から、不弥国の候補地として考えることができます。この地域には、まず古賀市の馬渡・束ヶ浦遺跡があります。弥生時代中期初頭の甕棺から銅剣・銅矛・銅戈が出土しており、首長墓の出現を見ることができます。弥生時代終末期から古墳時代初期の頃には、現在の志免町内で亀山墳丘墓が築られました。これは、不弥国の王墓とも推定されます。

そして宇美町には、糟屋郡域で最大規模の光正寺古墳があります。石棺や木棺など五つの埋葬施設が見られた古墳時代初期の前方後円墳で、ヤマト王権の地域首長墓と考えることができます。

不弥国を、福岡平野東部の糟屋郡域に想定した場合、その北岸の花鶴川河口に港があった可能性が指摘できます。そこから『魏志』倭人伝に記される水行、すなわち瀬戸内海の沿岸航路を東に進むと、岡山県の足守川流域に至ります。この地域には、弥生時代終末期の楯築墳丘墓や、飛鳥時代の鬼ノ城など原始・古代の遺跡群が豊富にあり、投馬国の舞台ではないかと考えられます。特に楯築墳丘墓は、全長が70メートルを超える弥生時代では最大規模の墳墓です。多量の水銀朱が敷き詰められた木棺墓と玉類や鉄剣などが出土しており、投馬国の王墓と考えられます。

4 邪馬台国の候補地

邪馬台国の候補地には諸説ありますが、近畿説に立った場合、大和(奈良)盆地東南部の奈良県桜井市一帯が、最も有力な候補地と考えられます。この地域では、邪馬台国と直接・間接的に関連する遺跡群が、濃密に分布しています。特に、邪馬台国の国邑、つまり首都の遺跡としての纏向遺跡や、卑弥呼の王陵という説もある箸墓古墳などは、その最たるものです。

纏向遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての大規模な集落遺跡で、昭和46年(1971)より現在まで、発掘調査が続けられています。遺跡の中心域では、東西に一直線に並ぶ4棟の掘立柱建物が見つかりました。これについて祭政一致の国事を行う、中枢部と考える立場もあります。周辺では墳丘墓群や古墳が相次いで築造されており、弥生時代終末期から古墳時代初期にかけて、墳丘墓から前方後円墳が誕生した様子が見えます。

纏向遺跡の南方500メートル付近には、箸墓古墳があります。全長275メートル、古墳時代初期の前方後円墳で、卑弥呼の王陵説が有力視される古墳です。その北方の黒塚古墳は、竪穴式石室から画文帯神獣鏡や三角縁神獣鏡など多種多量の副葬品が出土しており、箸墓古墳に後続する大王陵と考えられます。

(執筆:名誉館長 西谷 正)

(編集:学芸調査室 渡部邦昭)



岡本町4丁目遺跡



光正寺古墳



箸墓古墳北側くびれ部(左)と前方部



楯築墳丘墓の南側突出部



纏向遺跡から見た箸墓古墳の遠景



編集 発行: 令和3年10月26日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575 FAX 0942-75-7834
URL <https://kyureki.jp>